「忠」

前回までは、すべての人が生きる上で決して欠かすことのできない五つの根本恩について勉強しました。今月から学ぶ「五常」は、人として常に守るべき五つの徳目（道徳）です。解脱会で説く五常は「忠孝仁義礼」。一般に知られている儒教の五常（仁義礼智信）とは異なりますが、この五つを生活の中で常に心がけ、実行することで、金剛さまが理想とされた人間のあり方に近づくことができるのです。

まずは一つ目の「忠」について学んでいきましょう。

「忠」と言えば、「忠義を尽くす」「忠誠を誓う」「忠臣蔵」など時代がかったものに用いられる印象があります。辞書によれば、忠の漢字本来の意味は「心を尽くすこと（真心）」で、そこから「まこと」という読み方もされるようです。

解脱会の説く「忠」とは、敬神崇祖の敬神、つまり神を敬い、そのお蔭に感謝する心のことです。それは、目上の人に尊敬をもって接することにも通じます。また、忠の漢字は「口・心・一」に分けることができます。そこから、人間が天（神仏）に向かって心からの言葉（口）を発し、「一」が天地を貫いている姿と解釈して、「忠」とは「神仏に誓って言葉と心に嘘いつわりがないこと」とも説いています。

日本古来の神道では「清明正直」といって、清らかで明るく正しく素直であることが人間の理想のあり方とされてきました。正直であることが良いことで、嘘をつくのはいけないことなのは、子供でも知っていることです。しかし「嘘をついた」経験は人間、誰しもあるはずです。

人はどんな時に嘘をつくでしょうか？　例えば、怒られたくないからと自分の失敗を隠したり、相手に良く思われたくて心にもないお世辞を並べ立てたり、嘘をつくのは大抵、自分のためです。しかし、嘘でその場をしのいでも、その嘘を守るためにさらに嘘を重ねて、嘘は自分が得をするどころか苦しくなるばかりです。

また、自分では上手く隠せているつもりでも、思っている以上に周囲にばれているものです。「あの人の言葉は信じられない」と思われたら、表面上のお付き合いはしても、誰とも心から信頼し合える関係にはなれません。

いつも相手に敬いの心をもって誠実に物事にあたる「忠」の人は、皆から自然と好かれ、頼りにされます。日々の生活の中で「忠」を心がけてみましょう。

◎自分にできる「忠」の実践について考えてみましょう。